

# 和化漢文資料における「アフ」の用字について

## — 和漢混淆文との比較から —

磯 貝 淳 一

### はじめに

「和化漢文」と総称される資料には、古記録をはじめとして古往来・説話・注釈書等、様々な内容を持つものが存している。国語史学の分野においては、正格漢文とは異なる和化漢文独自の性格、和化漢文の用語・用字等の史的変遷、異なる文章ジャンルにおける言語事象の差異等、様々な視点から日本語文としての和化漢文の性格の解明が行われてきた。筆者は、特に和化漢文における用語・用字の差異に注目し、これらの記述を行い、言語事象と資料との関連性を考えようとしてきた。<sup>1</sup> 今後は、言語事象の記述に止まらず、用語・用字の差異を成立させる要因について深く追求していこうと考えている。

本稿は、動詞「アフ」の用字を手掛かりとして、和漢混淆文との比較を行ない、和化漢文内部からは明確にしがたい用

字の差異の問題について、その背景を探るための緒を見出そうとするものである。

### 一、和化漢文における「アフ」の用字

調査対象とした和化漢文十一資料<sup>2</sup>において「アフ」の表記に供されるのは以下に掲げる7字である。<sup>3</sup> 各表記の用法に着目しつつその使用をまとめる。

#### 〔値〕 全15例

〈逢会〉人等に出会いあたる

① 至第七日脱衣呪曰、若可値父之死骸者、我衣可没江中、

(注好選・上21才3)

② 聖語不違、今値沙門、早還本国伝法弘道、

(大日本国法華経験記・上324行)

〈遇機〉機会・時節等、また災難など好ましくない事態にめ

ぐりあたる<sup>③</sup>

③ 喜値仏法、摂持漸々修行矣、(大日本国法華経験記・上 3 68 行)

④ 即摩頂誘語曰、汝由宿業、今値此災、

(探要法花験記・下 13 才 1)

[合] 全 11 例

〔逢会〕

⑤ 時二獸来合、瞋眼相見、欲至害、

(注好選・下 34 才 3)

⑥ 陰、民部卿到来、相合、金峯精進初日道虚者

(後二条師通記・寛治 4 年 5 月 15 日)

〔合致〕複数のものが一つにあわさる、一致する<sup>③</sup>

⑦ 半鏡飛来、蘇規所来、而合如約矣、

(注好選・上 28 ウ 6)

⑧ 下人不加誠之間、置不合鞍、結着雜物、

(高山寺本古往来・242 行)

〔結婚〕男女(雌雄)が結び付く<sup>⑦</sup>

⑨ 僧祇律云、昔有鳥、合一雉交通令生子、

(注好選・下 31 ウ 5)

[合] 全 18 例

〔逢会〕

⑩ 三人各棄郷土、至会一樹之下、相共同宿也、

(注好選・上 18 ウ 2)

⑪ 左大臣被〔来〕、此日悩重、不自会、摂政会之、

(御堂関白記・寛仁 2 年閏 4 月 27 日)

〔遇機〕

⑫ 而当取滅、残日不幾、暫住此所、可会入滅、

(大日本国法華経験記・下 90 5 行)

[相] 全 1 例<sup>③</sup>

〔遇機〕

⑬ 從今日御仏名初、是式日依相御国忌、被行耳、

(御堂関白記・寛弘 4 年 12 月 14 日)

[逢] 全 55 例

〔逢会〕

⑭ 变为小僧、立於樹下、逢一樵父、

(統本朝往生伝・66 行)

⑮ 而称心神悩不逢、仍空帰也、人臣之節

(貞信公記・天慶 2 年 12 月 2 日)

〔遇機〕

⑯ 悲云、靈山釈迦、吾形成美令逢父法会、

(注好選・中 29 ウ 1)

⑰ 一日、逢或古老、予問先賢之風、

(雲州往来・下 73 才 7)

〔遇〕 全 67 例

〔逢会〕

⑱ 聖語不朽、今遇此人矣、我所披開法門、授与日本阿闍梨、

(拾遺往生伝・上 3 39 行)

⑲ 新欲令造之处、難遇敏心巧目之者、

(雲州往来・下 66 ウ 9)

〔遇機〕

⑳ 義士遇赦第六十五

(注好選・上 22 ウ 1)

㉑ 今年来、適遇政理明時之御世、

(高山寺本古往来・132 行)

[遭] 全 13 例

〔遇機〕

㉒ 此時遭九年之洪水、然而人民謗不菜食哉、

(注好選・上 6 ウ 1)

②③ 茂齋内親王(婉子) 遭兄弟(代明親王) 喪、

(貞信公記・承平7年4月1日)

〔合致〕<sup>3)</sup>

②④ 法空生希有難遭心、發願後至、花嚴寺西北三泉院前林中、

(探要法花驗記・上26ウ9)

〔結婚〕<sup>10)</sup>

②⑤ 楚那云人、家園内造小舎、居孀母養育、即密遭傍男、自

送年序、

(注好選・上34オ6)

以上の結果をまとめたのが末尾に付した表1である。<sup>11)</sup> 調査対象とした和化漢文では動詞「アフ」は「逢会」「遇機」「合致」「結婚」を表す用法が認められ、その表記として「値」「合」「會」「相」「逢」「遇」「遭」の7字が用いられていた。しかし、4種の用法の内「合致」「結婚」の両用法は用例数が僅少であつて、各資料を通じて使用が認められるのは「逢会」「遇機」の2種である。以下「逢会」「遇機」を表す用法を中心に検討を行うこととする。

〔兩用法において、各資料を通じて使用が多く認められるのは「逢」「遇」の2字である。また、先に挙げた「合致」「結婚」の兩用法が全く見られないことから、両字は「逢会」「遇機」に偏つて使用されることが分かる。意味用法と用字との関わりを見ると、

逢 II 「逢会」 中心に使用される

遇 II 「逢会」「遇機」 兩用法に使用される

という大凡の傾向性が指摘できる。その中にあつて、高山寺本古往来・貞信公記のように「逢 II 逢会」「遇 II 遇機」という使い分けが存している資料もある。但し、以下の例に見られるように類似文脈における「逢」「遇」の交替例も見られるため、和化漢文資料全体では、両字と使い分けは明確には并別し難い場合が多い。

②⑥ 未剋民部卿来臨、相逢、参高陽院之由、相語、

(後一條師通記・寛治7年1月23日)

②⑦ 衛門督来臨、相遇殿下参御齋院、

(後一條師通記・寛治7年4月29日)

②⑧ 大師延暦二十三年入唐、攀登天台山、遇道遂和尚、習天台

台法門、(龍谷大学図書館蔵大日本国法華経驗記・卷上第322行)

②⑨ 大師延暦廿二年入唐、攀登天台山、逢道遂和尚、習天台

法門、(真福寺文庫本大日本国法華経驗記の同文箇所)<sup>12)</sup>

その他の表記については、用法との関係は大凡  
値―逢会・遇機 合―逢会・合致 会―逢会 遭―遇機  
のようにまとめられよう。<sup>13)</sup>

和化漢文においては、「アフ(逢会・遇機)」の表記として「逢」「遇」両字を中心的に使用し、資料によつて他の漢字を使用する場合があることが明らかになった。最も字種が多いのは注好選(6字)である。次いで大日本国法華経驗記(5字)、探要法花驗記・拾遺往生伝・後一條師通記(4字)、雲州往来・貞信公記・御堂関白記(3字)、日本往生極楽記・

高山寺本古往来（2字）、続本朝往生伝（1字）となった。

以上の検討からは、説話・靈驗記類に使用字種が多いという大凡の傾向は指摘できるものの、用例数が少ないこと、意味用法上の違いが殆どないことから、これらの差異が何を示すのかという点は明らかにしたい。

しかし、以下に行なう和漢混淆文の調査結果と比較を行うことで、これらと和化漢文の用字に一定の傾向性が見出せるように思う。

## 二、和漢混淆文における「アフ」の用字

和漢混淆文においても同様の調査を行った。対象としたのは6資料<sup>①②③④⑤⑥</sup>。各資料における表記と用法の関係をまとめたのが末尾の表2表3である。

和漢混淆文では、全体的には仮名表記中心となっている。但し、今昔物語集は漢字表記中心であり、金沢文庫本仏教説話集も他と比較すると漢字表記の割合が高い。

先ずは、今昔物語集以外の和漢混淆文では、「逢会」「遇機」以外の用法は殆ど存しない<sup>⑦⑧</sup>。また、表記にばらつきが見られ、両用法に対する中心的な用字を認めたいことが分かる。

これらに対して、今昔物語集は異なる様相を呈する。表3より本集には、動詞「アフ」に対して、8種の表記がなされていると認められる。以下、各表記の用法と合わせて使用を概観する。

〔値〕 全239例

〈逢会〉

- ① 使、此教聞ナ出行<sup>ニ</sup>、其ノ郡ノ御谷ノ郷ニ一人ノ乞者ノ僧値<sup>ヘリ</sup>。  
(巻第12第25話)

〈遇機〉

- ② 此ノ家ニ至<sup>テ</sup>妻ヲ勸<sup>メ</sup>云々、佛ノ出世ニハ難値<sup>シ</sup>、經法ハ難聞<sup>シ</sup>。  
(巻第2第13話)

- ③ 忽ニ王難ニ値<sup>ニ</sup>既<sup>ニ</sup>其ノ本意ニ違<sup>フ</sup>。  
(巻第4第20話)

〔会〕 全168例

〈逢会〉

- ④ 其ノ後、沈裕、親シキ人ニ会<sup>フ</sup>、此ノ事語<sup>テ</sup>、夢ノ驗有<sup>ル</sup>事ヲ願<sup>フ</sup>。  
(巻第9第16話)

〈遇機〉

- ⑤ 外洲ノ行<sup>ク</sup>間、途中ニ忽<sup>ニ</sup>大雨ニ会<sup>フ</sup>。  
(巻第19第20話)

〈拮抗〉 同じような程度に並ぶ

- ⑥ 兵具ヲ調<sup>ヘ</sup>馬ニ乗<sup>セ</sup>、郎等二三十人具<sup>ル</sup>者<sup>ニ</sup>下<sup>レ</sup>、会<sup>フ</sup>敵无<sup>キ</sup>者<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>。  
(巻第29第19話)

〔合〕 全30例

〈逢会〉

- ⑦ 其<sup>レ</sup>見<sup>テ</sup>後、其ノ手ノ主ニ合<sup>ハム</sup>思<sup>フ</sup>、誰ト不知<sup>カ</sup>、可尋<sup>キ</sup>方无<sup>ク</sup>。  
(巻第10第8話)

〈遇機〉

- ⑧ 其<sup>レ</sup>食<sup>テ</sup>世<sup>ヲ</sup>經<sup>ル</sup>程ニ、世ノ中ニ食物皆失<sup>セ</sup>テ飢渴ニ合<sup>フ</sup>。  
(巻第10第8話)

〈合致〉

- ⑨ 若<sup>レ</sup>、我<sup>レ</sup>、他<sup>ノ</sup>女<sup>ニ</sup>娶<sup>ハ</sup>、我<sup>ガ</sup>半<sup>ノ</sup>鏡<sup>必</sup>飛<sup>ビ</sup>来<sup>、</sup>、汝<sup>ガ</sup>鏡<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>合<sup>。</sup>

(卷第3第13話)  
(卷第10第19話)

〈拮抗〉

- ⑩ 急<sup>ニ</sup>下<sup>リ</sup>有<sup>ル</sup>ミ、將門<sup>ガ</sup>威勢<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>合<sup>、</sup>非<sup>レ</sup>本意<sup>、</sup>否<sup>不</sup>遂<sup>テ</sup>隠<sup>レ</sup>シ<sup>。</sup>  
国<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>。

(卷第25第1話)

〈結婚〉

- ⑪ 合<sup>テ</sup>後<sup>、</sup>日<sup>来</sup>通<sup>ミ</sup>、男<sup>、</sup>女<sup>、</sup>美麗<sup>ヲ</sup>見<sup>、</sup>、難<sup>ク</sup>去<sup>リ</sup>勞<sup>ヲ</sup>思<sup>、</sup>、万<sup>、</sup>  
語<sup>ヲ</sup>ミ、

(卷第16第21話)

〈遇〉

- ⑫ 賊人<sup>、</sup>其<sup>ノ</sup>語<sup>ヲ</sup>得<sup>、</sup>山<sup>ニ</sup>行<sup>、</sup>沙門<sup>ニ</sup>遇<sup>、</sup>云<sup>、</sup>

(卷第2第32話)

〈遇機〉

- ⑬ 佛法<sup>ニ</sup>作<sup>レ</sup>遇<sup>、</sup>邪見<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>為<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>殺<sup>ス</sup>。

(卷第3第27話)

〈相〉

- ⑭ 汝<sup>ガ</sup>善根<sup>ノ</sup>因縁<sup>有</sup>我<sup>ニ</sup>相<sup>、</sup>、彼<sup>ノ</sup>医師<sup>ニ</sup>遇<sup>、</sup>苦<sup>シ</sup>濟<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>死<sup>ザル</sup>事<sup>ヲ</sup>、  
得<sup>、</sup>人<sup>ノ</sup>如<sup>也</sup>。

(卷第1第18話)

〈逢会〉

- 〔逢〕 全1例

- ⑮ 官人<sup>ニ</sup>逢<sup>、</sup>云<sup>、</sup>、此<sup>レ</sup>、華洲<sup>ノ</sup>張<sup>ノ</sup>法義<sup>也</sup>。

(卷第7第48話)

- 〔遭〕 全1例

〈遇機〉

- ⑯ 女<sup>ノ</sup>思<sup>ハ</sup>、我<sup>レ</sup>何<sup>ナル</sup>罪<sup>ヲ</sup>作<sup>、</sup>、日<sup>来</sup>間重<sup>キ</sup>禍厄<sup>ニ</sup>遭<sup>、</sup>死<sup>ニ</sup>蘇<sup>ル</sup>。

(卷第2第31話)

- 〔仮名表記〕 全2例

〈逢会〉

- ⑰ スルガナルウツノ山ベノウツ、ニモユメニモ人ニアハヌ  
ナリケリ

(卷第24第35話)

- ⑱ シデノ山コエヌル人ノワビシキハコヒシキ人ニアハヌナリ  
ケリ

(卷第27第25話)

「合」における「拮抗」「合致」「結婚」や、「会」における「拮抗」のような用法を持つものもあるが、それは少数の用例を認めるに止まる。大部分は「逢会」「遇機」において重なりを見せるものであり、用例の大部分がこの用法となっている。また、これら二つの用法の別も、用例数が僅少である「相」「逢」「相」「仮名」を除いては、各字相互に現れており特定の漢字と専用に結び付いてはいない。このことから、少なくとも「逢会」「遇機」の用法において、「値」「会」「合」「遇」の四字は、類似の使用がなされていることが分かる。巻毎における各表記の使用をまとめると以下のようになる。

値 ほば全巻に涉つて使用され、用例数が最も多い。本集における中心的用字である。但し、用例数は特に天竺・震旦及び本朝仏法部に多く認められる。

合 ほぼ全巻に涉つて使用される。

合 巻によって用例の有無が存するものの、説話部毎の使用に偏りは無い。

遇 天竺・震旦部にのみ使用が認められる。

相 天竺部にのみ使用が認められる。

逢 震旦部にのみ使用が認められる。

遭 天竺部にのみ使用が認められる。

各表記のあらわれ方が巻により異なることが分かる。先の用法と表記との結び付きの問題と併せて考えると、これらの7字は用法による書き分けを分担するものではなく、他の何らかの要因を背景として共存していることが予想される。

これら、用字の分布は有意のものと捉え得るのであろうか。一般的に本集は、天竺・震旦部が漢文訓読文体の、本朝仏法部は変体漢文体の、本朝世俗部は和文体の影響が認められるとされる。この解釈が用字法の問題にも適用可能であるとすれば、「遇」「相」「逢」「遭」の各字は、漢文訓読文体の影響を受けた部分に見られ、「値」「會」「合」各字は、文体上の差異とは関係なく全巻に涉つて使用されているということになる。

しかし、本集の用例をより詳細に確認すると、巻によって使用に偏りの存するものがある。例えば「値」について、当該字は先にも述べたように全巻に涉つて使用されているものの、本朝世俗部において顕著にその使用を異にすることが分かる。つまり、それまで天竺部から本朝仏法部においては、

地の文或いは会話文といった説話部分での使用が殆どであったものが、巻二十二以降においては65.4%が説話題での使用となっている。

○阿蘇史、値盗人謀逆語第十六 (巻第28第16話)

○右少弁師家朝臣、値女死語第七 (巻第31第7話)

「値」は本集において、最も用例が多い点からは中心的な用字であると認められるものの、本朝世俗部において使用の偏りが見られることが分かる。この部で使用率が高いのは、漢字専用表記が為される題目の部分である。これに対して、本文は漢字片仮名交りの表記を用いており、ここには「値」以外の漢字の使用が多くなる。このことから、「値」は基本的に天竺・震旦・本朝仏法の各部(漢文訓読文体・変体漢文体の影響が見られるとされる巻)において使用される字であり、本朝世俗部(和文体の影響が見られるとされる巻)においては題目での使用が中心となることが分かるのである。従つて、本集の「アフ」の用字は、数の上では「値」が中心、巻に偏り無く使用されるという意味においては「會」が中心的说であると言える。

調査を行った和漢混淆文では、今昔物語集とは異なり、全体的に仮名表記中心の様相を呈していた。また、漢字の使用を見ても、中心的使用と認められる漢字が今昔物語集と重なるのは、金沢文庫本仏教説話集のみである。仏教説話集は、今昔物語集と類似の用字の傾向を示し、「値」の用例数が最

も多く、「会」「遇」「遣」の使用も認められる。また、観智院補三宝絵詞にも1例ではあるが「値」の使用が認められる。

### 三、和化漢文と和漢混淆文との比較

「アフ」の用字に関するこれまでの調査結果をまとめ、和化漢文と和漢混淆文との比較を行うと、以下の点が明らかとなる。

①和化漢文では、7種の表記が存する内、全体を通じて中心的であると認められるのは「逢」「遇」の2字であり、「逢」「遇」の用法を主として担う。

②和漢混淆文では、仮名表記が多くを占め、中心的な用法である「逢会」「遇機」に対する主要な漢字表記を認めがたい。但し、今昔物語集・仏教説話集は漢字表記の割合が高い。

③今昔物語集・仏教説話集では「値」の占める割合が高く、和化漢文において中心であった「逢」は和漢混淆文全体においても殆ど使用されることはない。

さて、この内③について、調査資料の内、「値」を使用するのは、観智院本三宝絵詞・金沢文庫本仏教説話集・今昔物語集・注好選・探要法花験記・大日本国法華経験記・拾遺往生伝の各資料であった。これらは、何れも仏教に関わる説話・靈験記類の資料となっている。特に和化漢文では、古記録を中心とする俗家の文章には「値」が使用されることは少ない。

これは、表記主体・文章内容・用字法間の相関性の一端が現れているものと考えられる。先に和化漢文・和漢混淆文では「アフ」の表記に使用する主たる漢字に違いがあることを指摘した。このことは両文体範疇の用字法の違いを感じさせるものであった。しかし「値」の使用状況からは「仏教に関わるジャンルにおいて使用される」という文体範疇を超えた共通性が認められる。この点をより深く追求するためには、比較に供する文章ジャンルの偏りを無くし、俗家における古記録のような日常実用文を、仏家の側でも調査し比較を行う必要がある。しかし現段階では、比較的近いジャンルの靈験記と往生伝の様相から差異の存する可能性を指摘するに留める。類話を収載する大日本国法華経験記と拾遺往生伝において、次のような同一文脈内の用字の差異が存する。

○聖語不違、今値沙門、早還本國伝法弘道、

(大日本国法華経験記・上324行)

○聖語不朽、今遇此人矣、我所披聞法門、授与日本阿闍梨、

(拾遺往生伝・上339行)

仏家が表記主体である大日本国法華経験記では「値」が用いられ、俗家が表記主体である拾遺往生伝では「遇」が用いられている。

和化漢文の仏教説話・靈験記の資料と和漢混淆文の今昔物語集・仏教説話集とが「アフ」の表記に「値」を使用する点において共通性が認められ、特に和化漢文における検討から、当該字は仏家が深く関わる文章に使用される傾向性があるこ

とが分かった。

## むすび

動詞「アフ」の用字について、和化漢文と和漢混淆文との比較を行うことを通じて、両者の共通性と差異性の整理を行った。その結果、和化漢文・和漢混淆文共に「値」「合」「会」「相」「逢」「遇」「遭」という7種の表記のバリエーションを持ちながらも、資料によって選択の幅(用字の種類)が異なる実態が明らかになった。特に「値」については、

①仏教説話・靈驗記の和化漢文を中心に使用が認められる。

②和漢混淆文では、他と異なる様相を見せる今昔物語集・金沢文庫本仏教説話集の用字と①に掲げた和化漢文の用字との共通性が当該字の使用から窺える。

③和化漢文・和漢混淆文という異なる文体範疇において、それぞれが内包する文章群を分類する共通の指標を設定し、それに基づいて両者の関係性を明らかにする可能性が存する。

今後は、和化漢文・和漢混淆文それぞれにおいて指標となる言語事象を加えて両者内部の言語事象に基づく文章群の体系化を行い、両文体範疇がどのように関わっているのかという問題について実態を明らかにしつつ考えることとしたい。

(1) 拙稿「平安時代後半期の和化漢文資料における疑問助字の用法―表記主体の社会的属性の違いに関わる用字法の差異について―」(『国文学攷』第一五七号、一九九八年三月)等

(2) 使用テキストは以下の通り。本文の引用に際して、特に必要となる場合以外は、本文に付された訓点等は省略した。また解釈に資するため私に読点を施した。○注好選(『古代説話集注好選(原本影印并釈文)』)○探要法花驗記(『醍醐寺藏探要法花驗記』)○大日本国法華經驗記(『大日本国法花經驗記校本・索引と研究』)○日本往生極樂記(『天理図書館善本叢書平安詩文殘篇』)○続本朝往生伝(『平安朝往生伝集』書陵部)○拾遺往生伝(日本思想大系『往生伝法華驗記』)○高山寺本古往来(高山寺資料叢書第二冊『高山寺本古往来 表白集』)○雲州往来(雲州往来享禄本研究と総索引『本文研究篇』)○貞信公記(大日本古記録『貞信公記』)○御堂関白記(『陽明文庫藏本御堂関白記自筆本総索引』(一))○後二條師通記(大日本古記録『後二條師通記』)

(3) 各字は、前田本色葉字類抄・観智院本類聚名義抄において、

會  
アノ 貴反 逢 相 逢 値 對 觀 遭 一 變 (38字省略) 已上會也

\*「合」は名字門「アフ」の項(巻下42才2)に掲載

(前田本色葉字類抄・巻下34才3)



値 直事反 アト(上)タル平／アフ アツ 禾チ

會 戸外(去)反 ア(平)フ(上) ミル ムカフ／カ(上)ナ(上)ラス カ(平)ナ(平)フ  
アツマル ハム／ヒタ平(メ)平(上) タ(上)マ(上)／禾(平)

(同右・僧中21)

合 胡平(答)入反 ア平ハ平(セ)上(上) カ平ナ平フ(上) ヘ(上)通シ(上)

コ(上)ソ(上)通ル ハカル アツマル ヤハラカナリ／ア(平)フ(上) 又上開

(同右・僧中13)

遇 一萬(去)通 ア(平)フ(上) タマク タマサカニ スクル／ワツカニ カヘリミル

オモフク マイル 禾同

(同右・佛上572)

相 先高反 タスク ミル ツチシロ コモク ミチヒク アフ タカヒニ／マ(上)

サ(上)リ(上)カホ マコト キク 音サウ カタチ 又平 禾サウ

(同右・佛中764)

相 ア(平)フ(上) ニ(上)ル ミ平(上)ル平(上) カ(上)タ(上)チ／タ平(上)カ(上)通(上)ヒニ

トラシ ハケム／トフラフ イフ ヲサム ハカル タカシ マサ／スケ ミチヒク

(同右・佛下本1132)

逢 ツ平(上)チ平(上)シ平(上)ロ

(同右・佛上603)

遭 扶恭反／ア(平)フ(上)

(同右・佛上601)

のように和訓「アフ」との対応関係が確認され、当該和訓を

表記しているものと認めることができる。

(4) 「相逢」「相遇」等接頭辞「アヒ」を伴うものについても

併せて計上した。「会集」「値遇」等の複合語もしくは漢語

と見なされるものについてはこれを除外した。

(5) 時間・時期等、具体的な時間を目的語にとる場合には「遇

時」の項を立てる必要があるとも考えられるが、今回はこ

れらを含め「遇機」とした。

(6) 注好選(2例)、探要法花驗記(1例)、高山寺本古往来(1例)。

(7) 注好選(1例)のみ。

(8) 但し、陽明文庫蔵本御堂関白記自筆本では、「相」が本行

に無く、右傍に補入されている。当該字が無くとも文意が

通ること、今回調査した資料中唯一の例であること等から、

今後資料を広げて確認を行う必要があると考える。

(9) 探要法花驗記(1例)のみ。

(10) 注好選(1例)のみ。

(11) 表記の掲出は康熙字典の順位に従う。また資料の排列は

仏教説話・靈驗記・往生伝・古往来・古記録の各ジャンル

順とした。また「合致」「結婚」両用法は、認められる資料・

用例数(注を付した)がともに少ないため、表からは除外

してある。

(12) 高山寺本古往来の実態については、峰岸明「高山寺本古

往来における漢字の用法について」(『高山寺本古往来表白

集』東京大学出版会、一九七二年三月)に既に指摘がある。

(13) 校異の確認は、藤井俊博「大日本国法華経験記校本・索

引と研究」(和泉書院索引叢書39、一九九六年二月)によっ

た。

(14) 御堂関白記のみに認められる「相」の表記、1例以上の

用例が存しない「結婚」の用法についてはこれを除外して

いる。

- (15) 使用テキストは以下の通り。○観智院本三宝絵詞（『諸本対照三宝絵集成』）○金沢文庫本仏教説話集（『金沢文庫本仏教説話集の研究』）○三教指帰注（『中山法華経寺本三教指帰注総索引及び研究』）○法華百座聞書抄（『法華百座聞書抄総索引』）○打開集（『打開集の研究と総索引』）○今昔物語集（日本古典文学大系『今昔物語集』一―五、\*引用に際して、テキストに存する振り仮名・会話引用等の括弧は、省略に従った。また、表記研究を行うにあたり、活字テキストを使用することは最善の方法とは言えないが、今回は便宜的にこれを使用した。尚、テキストの翻字の方針により、漢字表記が底本に従うものであることを確認した。）
- (16) 今昔物語集については、巻毎の様相をより詳細に検討するために別に別に取り立てて表3とした。
- (17) 三教指帰注に「合」「合致」（1例）、金沢文庫本仏教説話集に「会」「合致」（1例）が認められる。また、打開集には「対」字が「逢会」（3例）、「遇機」（1例）の表記として使用される。
- (18) 観智院本類聚名義抄に「カナフ」訓も見える。（僧中21）
- (19) 前田本色葉字類抄「カナフ（第3位合点付）」に掲出が見える。（上103ウ1）
- (20) 2例共に和歌の表記に使用される。
- (21) 各字に用法上の差異が無いということを証明するためには、更に詳細な検討が必要となる。今回行った意味用法の分類をより詳しくする、或いは対象を分類することによって、用字と用法との新たな対応が見出される可能性がある。しかし、表3に示すように、各字が大凡同様の用法を有し、字による偏りが無い（用例数の僅少なものを除く）ことからこのように判断した。
- (22) 峰岸明「今昔物語集に於ける変体漢文の影響について―「間」の用法をめぐって―」（『国語学』三六、一九五九年三月）他。
- (23) 和漢混清文の説話集において、用語に差異が認められることは峰岸明「秉燭に及びて」小考（『佐伯博士古稀記念國語學論集』所収、昭和四十四年）等に既に指摘がある。
- (24) 「値」の使用は正格漢文、またそれに近い性格を有する和化漢文資料においても認められる。この場合、仏家・俗家に関わることなく使用がなされるようである。このことに関して、用字法と位相差の問題だけではなく、正格漢文への指向性という観点を取り入れつつ考察を進めていく必要があると考える。今後これらの資料の調査を行い、分類基準に加えることとしたい。そのような背景を考慮に入れつつも、今回は正格漢文の規範が弱くなる文章においても、仏家の文章では当該字のように「常用」以外の表記が使用される場合が認められることを指摘しておきたい。
- (25) 峰岸明氏は前掲注23論文において、『今昔物語集』『沙石集』『打開集』『宝物集』等の仏教説話集に、時刻の推移を表す「およぶ」の用法が見あたらない点に触れ、『平家物語』

『古今著聞集』等「軍記物語・世俗説話集との間には、用語・語法などの上で、なおかなりの径庭の存することが看取される」と指摘している。今回の調査結果からは、仏教説話集に分類される和化漢文・和漢混清文の中にも、更に差異が存することが明らかになった。恐らくは、文章内容に基づく分類とは異なる、言語事象の差異に関わる問題であると考えるが、この点については今後の課題としたい。

〔付記〕本稿は国語学会中国四国支部第四十七回大会（平成十三年十一月十・十一日）における口頭発表に基づいてまとめたものである。席上、多くの方々から貴重なご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

（広島女学院大学非常勤講師）

表 1 和化漢文における「アフ」の用字

(各用字の数値は、上段が全用例数、下段が逢会(右)・遇機(左)の用例数を示す)

後	御	貞	雲	高	拾	続	日	探	大	注	資料 後記
・	・	・	・	・	2	・	・	6	6	1	値
					2			1 5	3 3	1	
3	1	・	・	・	・	・	・	・	・	2	合
3	1									2	
6	7	・	1	・	・	・	・	1	1	2	会
6	7		1					1	1	2	
・	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	相
	1										
24	・	7	2	2	2	2	1	2	1	12	逢
24		7	1 1	2	2	2	1	2	1	3 9	
7	・	1	3	2	9	・	5	14	23	3	遇
3 4		1	2 1	2	6 3		2 3	7 7	10 13	2 1	
・	・	1	・	・	1	・	・	・	3	6	遭
		1			1				3	6	

注 注好選  
 大 大日本国法華經驗記  
 探 探要法花驗記  
 日 日本往生極樂記  
 続 続本朝往生伝  
 拾 拾遺往生伝  
 高 高山寺本古往来  
 雲 雲州往来  
 貞 貞信公記  
 御 御堂関白記  
 後 後二条師通記

表2 和漢混淆文における「アブ」の用字

(各用字の数値は、上段が全用例数、下段が逢会(右)・遇機(左)の用例数を示す)

資料	表記	三	法	打	教	仏
値	1 1	1 4	1 1	1 1	1 4	5 1
合		1 1	1 1	1 1	1 1	1 1
会	2 1	2 1	2 1	2 1	2 1	2 1
相	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1
逢						
遇	3 1	3 1	3 1	3 1	3 1	3 1
遭						
仮名	28	8	3	2	2	2

三 東寺観智院本三宝絵詞  
 法 法華百座聞書抄  
 打 打聞集  
 教 三教指帰注  
 仏 金沢文庫本仏教説話集

